

C-12 作業被服の構成と地域性の研究 (茅ノ報) —山形県・飛島を中心として—
県立米沢女短大 徳永幾久

1) 山形県に伝承されてきた在来型 褌・漁作業衣も国際的文化の大衆化傾向におされ
もはや消滅寸前があるので、昭和27年末 山形県各地のそれらの形態 様構など
について調査を急いできたが、この被服には 地域性の残存の強いことを知った。被
服の地域性の研究は、被服の生存状態を知る 被服生態学として 特に民俗被服の場
合は必要である。そこでその地域で 生れ 育ち 喪親し あるものは消滅し ある
ものは生存をつづけてきた 被服の生態を 地域的に把握し 究明しようとするもの
である。

2) 山形県は 村山 最上 置賜 庄内に四区分され 統一した政權はもたなかった。
この四地区は 地理的条件や生活方法に相違があり、作業衣の構成 様構にも特色
がある。また 県唯一の離島である飛島には、更に違った特色があるので、今般は
昭和35年より3回にわたる実地調査によつて作業被服の生態の特色を採集した結果と
交流のあつた庄内やアイヌの被服を比較した。

3) 地域性を残存させる衣料供給源を 対岸の古着に求めたので 古布を 縫い刺し
(ドンザに) 重ね刺し(ボダラ) 切りつき(ドンザに)する技術ができた。後、アイヌ文様
刺戟され 島独特の 曲線刺し 即ち まちけ刺し(じやんばら刺し) かんせ刺し が
でき 背及び後袖を正面性とする文様型式が生れた。この装飾技術は 嫁の面子にか
けられ 冬期の仕事として育てられたが 新生活への意識と改善は これらの技術の
消滅と 被服地域の解消を同時に行ふ結果となつた。